

# 近代簿記の系譜

久野 秀 男

## 目 次

- 1 この調査研究の目的と範囲
- 2 イタリア簿記の継承者達：オールドカッスル、メリス、ピールおよびダフォーン
- 3 (補論)；Ledger の語源
- 4 伝統の完成者と改革者：メヤーとブース  
——単一仕訳帳制から複合仕訳帳制へ——
- 5 複合仕訳帳制の継承者達
- 6 現金式仕訳帳制の登場：ハミルトン
- 7 異端の改革者：E. T. ジョーンズ
- 8 近代簿記の開拓者達：ケリーとコリー
- 9 近代簿記の完成者：クロンヘルム
- 10 現代簿記の開拓者達：ソーヤーとバタースビー
- 11 『バランス』概念の展開と問題点
  - (1) 元帳の balancing と残高勘定
  - (2) イタリア簿記の伝承
  - (3) 「残高勘定」・「試算表」・「バランス・シート」
  - (4) 「バランス・シート」への展開
  - (5) 拡大された「バランス・シート」

## 1 この調査研究の目的と範囲

『別稿』(『企業会計』, 昭和48年1月号, 「会計近代化の系譜」) でごく簡単なスケッチを示しておいたように、日本の近代会計史の研究にとって、その先達としての役割を果たしたイギリスの事情とくに産業革命前後の状況を解明し

ておくことは、必要かつ不可欠とってよからう。同時に、これを近代会計史の問題ないし会計史の全般の問題としてみても、15世紀以来のイタリア簿記の伝統を脱却して、近代簿記への突破口を開いていった18世紀中頃からのイギリスの簿記諸家の努力と功績とは、みのがせない重要な意味をもっている。この拙論は、史記『列伝』のひそみにならって、簿記諸家の業績を通して近代簿記の系譜をさぐってみようとする試論である。動向と問題点とが明らかになれば幸であると考えている。さらに、末尾に、簿記の中核的な『バランス』概念につき、発展史にとらえた概説を加筆しておく。また、日本の近代会計制度への直接・間接の影響についても、おりにふれてのべておきたいと思う。

調査の対象とした簿記諸家とその書目を、あらかじめあげておく。いずれも、英国勅許会計士協会図書館所蔵の原本の複写版で、現在、学習院大学法経図書館と筆者の研究室の蔵書の一部である。オリジナル・タイトルは、いずれも極めて長文のもので引用しにくい面を考慮し、短かくした私訳で示すことにした。このほかに第11項のはじめには、アメリカとカナダの著者名と書目を列記してある。

J. ピール『完全記帳の方法と様式』(1553年版), 『貸借手引き』(1569年版), J. メリス『記帳法入門』(1588年版), I. C. Gent (one Carpenter Gent.)『最良記帳法』(1632年版), R. ダフォーン『商人鑑』(1635年版), A. リ

ーセット『両房法』(1660年版), S. モンテージ『貸借法』(1682年, 再版), R. コリンソン『完全な会計人』(1683年版), a person of Honour『会計紳士』(1714年版), A. マギー『簿記原理』(1718年版), A. マルコルム『簿記論』(1731年版), H. フテファンズ『イタリア簿記』(1735年版), J. メヤー『簿記論』(1736年版), D. ドーリング『完全イタリア簿記』(1765年版), W. ゴードン『国際会計人』(1768年, 再版), B. ドン『会計人』(1778年版), R. ハミルトン『商業入門』(1788年, 再版), B. ブース『完全簿記』(1789年版), E. T. ジョーンズ『イギリス式簿記』(1796年版), J. W. フルトン『英印簿記』(1800年ロンドン版, ただしベンガル版は1799年刊行), P. ケリー『簿記要論』(1801年版), P. ディーガン『簿記全書』(1807年版), J. セジャー『商人簿記入門』(1807年版), J. モリソン『完全な商人簿記』(1808年版), J. ランバート『恒久バランス』(1812年版), M. パワー『明解複式簿記』(1813年版), F. W. クロンヘルム『新式簿記』(1818年版), R. ラングフォード『イタリア式商人簿記』(1822年版), I. P. コリー『実践簿記』(1839年版), B. F. フォスター『改良簿記教授法』(1843年版), W. イングリス『単複簿記』(邦訳『商家必用』, 1849, 1861, 1872年版), A. プリング『法律簿記全書・商業簿記実践』(1850年版), D. シェリフ『複式簿記全書』(1852年版), J. ソーヤー『簿記組織』(1862年版), T. バタースピー『完全複式簿記』(1878年版), 以上のほか W. ミッチェル『新式完全簿記』(1796年版, フィラデルフィア刊)

イギリス簿記の発展史的な視点から, これらの人々の業績を強いて典型的に段階づけをおこない, とくに目立った簿記書の著者名をあげてその史的な役割を明らかにしてみると, 次のようになるのではないかと思われる。

伝統的なイタリア簿記の紹介者・伝承者としてのオールドカッスル, メリス, ピールおよびダフオーン

伝統的なイタリア簿記の完成者としてのメヤー

伝統的なイタリア簿記の改革者としてのブース

実用簿記(現金式仕訳帳制)の提唱者としてのハミルトン

異端の改革者としてのジョーンズ

近代簿記の開拓者としてのケリーとコリー

近代簿記の完成者としてのクロンヘルム

現代簿記の開拓者としてのソーヤーとバタースピー

以下, これらの人々を中心として, 発展史的な解析をすすめてみよう。

(補注) ウルフ A. H. Woolf『会計小史』(A Short History of Accountants and Accountancy, 1912)の第2編・第12章‘English Works on Book-Keeping’(pp. 131~143)は, イギリス簿記書を取扱った有名な業績であり, あまねく知られているところである。しかし, 率直に言えば, オールドカッスル以来の若干の簿記書について, その取扱いは平面的で, 内容に立ち入った解析が比較的乏しく, とくに, 発展史的な考察において不足しているというのが, 筆者のひそかに不満とするところである。あえて, 類似のこのような拙論を公表したゆえんである。比較していただければ幸いである。

## 2 イタリア簿記の継承者達:

オールドカッスル, メリス, ピールおよびダフオーン

邦暦で天文12年8月, 種子島に鉄砲が伝来したこの月に, ロンドンの John Gough という印刷業者が, オールドカッスル(Hugh Oldcastle)の執筆になると伝えられている簿記書を出版した。英語で書かれた最古の簿記書で, 時に, 1543年8月14日であった。その

オリジナル・タイトルは、次のとおりである。

Here ensueth A profitable Treatyce called the Instrument or Boke to learne to knowe the good order of the keypyng of the famouse reconyng, called in Latyn Dare et Habere, and in Englyshe, Debitor and Creditor.

この書物は、現在までのところ一冊も発見されていない。R. R. Coomber, 'Pioneers in English Book-Keeping Texts-Hugh Oldcastle and John Mellis,' *Accounting Research*, Vol. 7, No. 2, April, 1956. によると、1779年頃にはすでに稀観本であったらしく、1852年に B. F. Foster, *The Origin and Progress of Book-Keeping*. によって、その名が明らかになったといわれている。しかし、フォスターのいつている書物というのは、次にのべるメリス簿記書のことではなからうか。メリス(John Mellis)によると、オールドカッスルは、ロンドン市のコールマン街の商人リチャードの末子で、彼の簿記書の刊行に先立つ約半年前、1543年のはじめに没したと伝えられている。

邦暦で天正16年8月、秀吉の有名な天正の刀狩り発令の翌月、1588年8月に、メリスの簿記書が刊行された。そのタイトル・ページの記事は、次のとおりである。

A brief Instruction and maner how to keepe bookes of Accompts after the order of Debitor and Creditor and as well for proper accompts partible, *etc.*. By the three bookes named the Memoriall, Journall, and Leager and of other necessaries appertaining to a good and diligent marchant. The which of all other reckonings is most lawdable : for this treatise well and sufficiently knowen, all the wayes and maners may be the easier

and sooner discerned, learned and knowen. Newly augmented and set forth by John Mellis, Scholemaster. 1588.

メリスは、この書物の巻頭で、『読者へ』という表題のもとで、こうのべている。

「私は、1543年8月14日にロンドンで出版された昔の古い簿記書の書きかえ人(renewer)であるにすぎない。その簿記書は、Hugh Oldcastle が編成して公刊したものである。」

そこで、本稿では、以下、メリスのこの書物を、『オールドカッスル・メリスの簿記書』とよぶことにする。

『オールドカッスル・メリスの簿記書』は、1494年にベニスで出版された最古の印刷された簿記書と伝えられている有名なパチオリ(Fura Luca Pacioli)の『ズムマ』(その一部の「計算記録詳論」*'Computis et Scripturis'*)と内容、章節の区分とタイトル等が酷似しており、帳簿のシステムとしては、日記帳・仕訳帳・総勘定元帳の三主要簿と補助簿とからなる典型的なイタリア簿記ないしベニス簿記の伝承である。1939年にロンドンで出版された P. クリベリの英訳『ズムマ』(最も原典に忠実な訳として有名である。)と比較すると、一入その感が深い。具体例として、イタリア簿記の中核ともみるべき「財産目録」を解説している第2章のタイトルを比較してみよう。

(クリベリの『ズムマ』の英訳)

Of the first principal part of this Treatise called the Inventory, what it is and how it should be made by Merchants.

(オールドカッスル・メリスの簿記書)

This first and principall part of this treatise sheweth (注・shows のこと) how an Inventory ought to be ordered among marchants.

前掲の Coomber 論文では、この両書の酷似について、次のような興味ある記述をして

いる。

「パチオリ簿記書との類似のために、オールドカッスル簿記書がパチオリの英訳本であるとみられたこともあるが、スタイルや内容の細部にわたってみると、多くの点で両書には相違がみられる。Kats も指摘しているように、パチオリの幾章かはオールドカッスル・メリスでは完全に欠落しており、また、後者には、パチオリにみられない多くのラテン語のフレーズや格言がふくまれている。そこで、次のような推論が可能であると考えられたことがある。すなわち、パチオリもオールドカッスルも、実は、おそらく手書きの同じ内容の簿記書を原本としたもので、オールドカッスルの場合の原本がたまたまラテン語で書かれていたのである。」

なお、この『原本』の著者とみられている人物は、インピン (J. Ympin) の簿記書の序論にもその名がみえている *Juan Paolo di Bianci* であるという。

興味ある問題である。筆者もかねがねパチオリの説明しているいわゆるイタリア (ベニス) 簿記の内容が、余りにも整然と備っており (あるいは、ととのいすぎており)、彼が実務経験からえた知識をもとにしてまとめたものとみる考え方に、疑をもつもの一人であることを申し添えておきたい。

『オールドカッスル・メリスの簿記書』には、「かの有名な損益の勘定について」(of the famous accompts called the profit and loss) の説明もあり、資本主勘定への振替や、諸勘定の締切りに関する明快な解説があり、第25章 (終章) には、「試算表」に関する次の記述もみえている。

「帳簿残高を確認するために、左右の両頁よりなる適宜な紙幅の一葉の紙片を準備し、中央から左右を区別し、右側頁に元帳の各口座の貸方残高の全部を写しとり、左側頁にその借方残高の全部を写しとる。貸借各々の側の合計が一致すれば、帳簿が正しく記録され

ている証拠となる」。損益勘定を資本主勘定に振替えた後に作られれば、今日の「繰越試算表」となるわけである。

このイギリス初期の代表的な簿記書の内容を示すために、各章のタイトルを一覧して表示しておこう。

- 第1章 ベニス式により、元帳、仕訳帳およびその他の帳面を用いて勘定記録をするための妥当な手続。
- 第2章 財産目録の作成に関する本書の最初の重要な部分。
- 第3章 正規の財産目録の様式、その雛形と作成手続。
- 第4章 善良な商人に対する一般的な忠告。
- 第5章 記録整理と名づけた本書の第2の重要な部分および3種の主要簿。
- 第6章 日記帳と名づけた最初の帳面、その意義と記帳の手続および目的。
- 第7章 日記帳の雛形。
- 第8章 9種の売買方法。
- 第9章 仕訳帳と名づけた第2の主要な帳面およびその記帳手続。
- 第10章 仕訳帳の借方と貸方、元帳で用いるふたつの勘定、現金と資本。
- 第11章 元帳と名づけた最後の第3の主要な帳面およびその記帳手続。
- 第12章 仕訳帳から元帳への転記。
- 第13章 現金勘定と商品勘定への転記。
- 第14章 元帳での商品勘定の取り扱い。
- 第15章 取りつき業務の簿記。
- 第16章 3種の主要簿による商会の勘定記録の方法。
- 第17章 費用と原価、経常項目と異常項目。
- 第18章 元帳での損益勘定。
- 第19章 新元帳への繰越手続。
- 第20章 誤謬の訂正。
- 第21章 帳面の平均、新旧元帳の間の継続の検証手続。

- 第22章 商品勘定の締切り。
- 第23章 小売商店の勘定記録の方法。
- 第24章 書翰の整理方法その他。
- 第25章 要約

邦暦で天文22年(この8月に第1回の川中島合戦おこる), すなわち1553年に, 現存する最古の英語の簿記書がロンドンで出版された。著者はピール (James Peele) というロンドン在住の製塩業者で, 1562年から85年まではクライスト・ホスピタルの書記であったと伝えられている。そのオリジナル・タイトルは, 次のとおりである。

The Maner and Fourme how to kepe a perfecte reconyng, after the order of the moste worthie and notable accompt, of Debitour and Creditour, *etc.*, 1553.

次いで, 1569年には彼の第二の簿記書がでており, そのオリジナル・タイトルは, 次のとおりである。

The Pathe waye to perfectnes, in th'accomptes of Debitour, and Creditour : *etc.*, 1569.

このピールの第一の簿記書の完本は, 現在のところ1部しか発見されておらず, 英国勅許会計士協会図書館が所蔵している。複写版としては筆者の研究室にも入っている。H. J. Eldridge & L. Frankland, *The Evolution of the Science of Book-Keeping*, 1954, p. 32によると, プラーグの Carl Peter Kheil がその発見者であるという。

ピール簿記書の大半を占めているのは, 開業財産目録からはじまる主要簿の記帳雛形による解説であり, 主要簿として, Journal あるいは Day booke, The Quaterne あるいは Greate booke of accomptes の名をあげている。今日の「仕訳日記帳」に相当する帳簿名として Journal のほかに Day booke をあげているのは注目してよい。また, ベニス簿

記での *Quaderno* に当る名称, またヨーロッパ大陸系の「大帳」(イタリア, フランス, スペイン等) ないし「首帳」(ドイツ) に相当する 'Greate booke' を用いている点も注目される。'The Pathe waye' では, これが Leager にかわっている。この Leager という特殊な用語については, 次の(補論)で諸説をあげて紹介する。、

ピールの2冊目の 'The Pathe waye' は, 前著の約3倍ほどのボリュームがあり, 画期的な充実ぶりである。最初に「問答形式」で簿記の一般ルールに関する解説があり, ついで, 財産目録, 仕訳日記帳, 元帳という順に明晰な説明がなされている。

邦暦で元和11年すなわち1635年に, ロンドンでダフォーン (Richard Dafforne) の簿記書が出版された。この書物は, Gerard Malynes の 'Consvetavdo, vel, Lex Mercatoria or, The Ancient Law-Merchant, *etc.*' (333頁) と合本になっている。ダフォーン簿記書のオリジナル・タイトルは, 次のとおりである。

The Merchants Mirrour: or, directions for the perfect ordering and keeping of his accounts; Framed by way of Debitor and Creditor, after the (so termed) *Italian-Manner*: containing 250 Rare Questions, with their Answers, in forme of a Dialogue. As likewise, A Waste Book, with a compleat *Journall* and *Leager* thereunto appertaining; unto the which I have annexed two other *Waste-books* for exercise of the Studious: and at the end of each is entered the briefe Contents of the *Leagers* Accounts, arising from thence. And also A Moneth-Booke, very requisite for Merchants, and commodious for all other Science-Lovers of this famous Art.

なお、合本されている Gerard Malynes の本にも241頁以下の 'Of Merchants Accounts kept by Debitor and Creditor' (第20章) でイタリア簿記の解説がなされている。

ダフォーンの簿記書は、開業財産目録から出発して、「日記帳」(Memorials or Waste-Book), 「仕訳帳」(Journall), 「元帳」(Leager) とすすんでいく典型的なイタリア簿記を忠実に継承している。定期決算制はなく、「元帳を締切る必要」という設問について、「帳面に余白がなくなったとき、商売をやめるとき、店主が死亡したとき」と答えている。この簿記書『商人鑑』は、1636年、1651年、1656年および1686年にそれぞれ重版しており、重版した最初のイギリス簿記書である。初期のテキストとしては、最もポピュラーなものとなった。

ダフォーンは、アムステルダムから後にイギリスにきた商人で、当時のロンドンの商人達の簿記を評している。「尊大にしてしかも頑迷なる無知」と。

内容を概括しておこう。

タイトル頁の次に、この本の献呈者一覧と書簡体の献詞がある。ついで Val. Markham という署名入の紹介文があるが、その冒頭の部分に、「借方と貸方という最も優れた形式による商人簿記書が、優れた著者により母国語である英語で書かれ印刷されでことは、稀有のことである。」とのべられている。

以下、「簿記の先駆者の意見」、「本書のねらい」、「教師への提言」が数頁あり本論に入る。この本論の部分は、「商人簿記序論」からはじまる。この序論は、帳簿雛形による解説の部分の前説に相当するもので、明治初期の本邦簿記書の「凡例」に相当する。つまり「序論」ないし「凡例」で簿記の一般ルールを説明し、帳簿雛形によって具体的に記帳の解説をするという定型なのである。

「商人簿記序論」の部分は、Philo-Mathy と Schoole-Partner との間答形式になって

いる。Philo-Mathy とあるのは、結合辞のフィロ「愛する・愛する人」・マス (Math. Mathematician) であろう。

第4頁以下には、現金出納帳等の補助簿の解説があり、5頁の下段には「仕訳帳およびそれに先立つ<sup>ウエスト・ブック</sup>当座帳」、「元帳およびそれに先立つ仕訳帳ないし日記帳」、「所有財産<sup>ミラー</sup>の鏡としての元帳ないし大帳」の解説がある。

全54頁のこの「序論」は、簿記の全般にわたる優れた解説を、問答体でうまくまとめている。また、55頁以下の帳簿雛形も適切・明快であり、手引書としては、大そうゆきとどいている。度々重版され普及したのもゆえなしとしない。

### 3 (補論); Ledger の語源

イタリア (ベニス) 簿記を忠実に継承した初期のイギリスでは、帳簿名もそのまま英訳しているが、唯一の(奇妙な)例外として「元帳」(Ledger) がある。もっとも Ledger と綴るのは、比較的新しく、Leager, Leger, Leiger, Leidger, Ledge, Lager 等と綴ったケースもある。

ヨーロッパ大陸系の「元帳」という用語を対比して列挙し、かつ、その英訳を参考のために併記してみよう。

イタリア……*libro mastro*…master book  
*quaderno*……… copy book  
スペイン……*libro grande*………great book  
フランス……*grand livre*………great book  
ドイツ……*Hauptbuch*……… head book  
イギリスの古い名称では great book (great booke) の事例もある。

この点に関しては、古くから、本稿にも名のみえている若干の簿記諸家によって論じられているので、紹介しておこう。なお、ケリーの所見については、第8項を参照されたい。

S. モンテージ (Stephen Montage) 『貸借法』(Debtor and Creditor made easie: etc., 1675, 1682) は、この 'Leidger' は、イタリア語の *Ledgiero* からきており、その語意は「総勘定の状況を通覧するのに容易かつ敏速」という意味からきているという。

J. メヤー (J. Mair) 『簿記論』(Book-Keeping Methodized, 1736) は、やはりイタリア語からきており、Art (巧妙), Dexterity (手早い) という意味をふくむという。

P. ディーガン (Paul Deighan) 『簿記全書』(A Complete Treatise on Book-Keeping, 1807) は、Bailey の説をまず引用して、オランダ語の動詞 '*Legger*' (正しくは *Leggen*, 英訳すれば to lie in a place あるいは to remain in a place となる。) にもとづくとする考えを紹介した後に、彼自身の考えを、次のようにのべている。もともとこの帳簿名は、Liegemen (封建君主の家臣、小作人) の賦役、小作料等を記録する帳簿 'Lieger-Books' あるいは 'Leiger-Books' に由来するものであると。

#### 4 伝統の完成者と改革者：メヤーとブース

——単一仕訳帳制から複合仕訳帳制へ——

イギリスの産業革命を時代的背景として、伝統的なイタリア簿記の伝習に、大きな変化がおこることになる。18世紀の前半と後半とを代表するまことに対照的な2人の簿記家の名をあげよう。すなわちメヤー (John Mair) とブース (Benjamin Booth) である。彼等の簿記書の内容に立ち入った説明は後述するが、まず両者の特色を浮き彫りにする目的で、本頁右側上段の図表を作ってみた。なお年号は簿記書の刊行年次を示す。

1736年から1789年、この間に産業革命はいかに展開していったか。これは彼等の簿記書の社会的背景として、極めて重要な意味をも

J. メヤー	B. ブース
1736年	1789年
イタリア簿記の完成者	イタリア簿記の改革者
単一仕訳帳制の採用	複合仕訳帳制の採用
エディンバラの MA (学士)	ロンドンの商人
あらゆる意味で、テキストとしての完成品	未完成ではあるが実践的な指導書

つ。ここでは、その象徴的な事件をあげるにとどめておこう。1764年 (多軸紡績機の発明)、1768年 (水力紡績機の発明)、1779年 (ミュール紡績機の発明)、1787年 (カートライト力織機の完成)、これらは、通常、木綿工業の4大発明といわれている。綿製品の輸出額は、1730年 (13,000 ポンド) から1780年 (355,000 ポンド) と約27倍に増加している。綿花の輸入額は、約5倍の増加である。

スコットランドの首都エディンバラ在の AM (Artium Magister) メヤーの簿記書のオリジナル・タイトルは、次のとおりである。

Book-keeping Methodized: or, A Methodical Treatise of Merchant-Accompts, according to the Italian Form. Wherein, the Theory of the Art is fully explained, and reduced to Practice, by Variety of suitable Examples in all the Branches of Trade. etc., 1736.

初版以降、実に14版を重ねたものであるが、内容の紹介・論評に先立って、先人の批評を若干あげておこう。

F. W. クロンヘルムの『前掲書』(1818年、後述する。) の 'Sketch of the Progress of Book-keeping' によると、「最も完成されたイタリア簿記の典型」とされており、また、J. W. フルトンの『前掲書』(1800年) の 'Notes to the Introduction' (p. 17) による

と、「メヤーによって、簿記理論の土台がかためられた」とのべるとともに、数少ない実践派簿記家の首領格が B. ブースであったことを指摘している。この見方は、たしかに卓見である。なお、フルトンは、ブースのほか、すぐれた実践派の簿記家として、T. K. Gosnell, 'An Elucidation of Italian Method of Book-keeping with pre-observations on Jones' English System, London, 1796'. と J. H. Wicks, 'Book-keeping Reformed, London, 1797.' の 2 人の名をあげている。書名はいずれもエルドリッジ (H. J. Eldridge, *The Evolution of the Science of Book-keeping*, 2nd. ed., revised by L. Frankland, 1954) の書目によった。この 2 冊は入手していないので詳細は不明である。

メヤーの簿記書のアウトラインを示そう。序論、第 1 編 (Book 1), 第 2 編, 第 3 編および補論から構成されており、序論で簿記の定義等をのべた後、第 1 編で「当座帳」(日用帳) 'Waste-book' を説明し、第 2 編で「仕訳帳」および貸借記帳のルール並びに範例をあげて元帳諸勘定を巧みに解説している。第 3 編ではとくに元帳の記帳法や残高勘定の機能を解説し、補論で各種の補助簿と取引の解説をしている。本論 172 頁, 補論 75 頁からなる。

今日の日からみても、すこしもみおとりしないくらい「テキスト」としてはよくまとまった構成と内容とをもっている。説明の次叙には、まことに整然たるものがあり、同時代の簿記テキストとしては出色のできばえである。一種のゆきづまり、あるいは新鮮味を欠いた物足りなさ、を感じさせるほどの「完成品」であるともいえよう。

なお、開業財産目録からはじめて、当座(日用)帳、仕訳帳、元帳とすすむ説明の具体的な内容の引用は省略するが、メヤーが、元帳の「勘定」としての 'Ballance Accompt', 'Profit and Loss Accompt' これらと、報

告書としての 'Ballance Sheet', 'Profit and Loss Sheet' (いずれも彼の用語法による) とをはっきり区別していること (『前掲書』88頁), を特記しておきたい。「残高勘定」・「損益勘定」という元帳の「記録」としての集合勘定と、「報告計表」としての 'sheet' との区別ができているということは、18世紀前半の当時としてはめずらしい事で、19世紀に入ってからでさえも、初期の頃では、「記録」と「報告」との機能的な区別がはっきりしないものが多いのである。つまり、財務諸表制の確立は、ほとんどみられていない。

メヤーに代表される伝統的イタリア簿記の伝習から脱却して、新生面をきり開いたのが、ロンドン在住の商人、ブース (Benjamin Booth) であった。時あたかもフランス大革命の年の 1789 年に出版された彼の簿記書のオリジナル・タイトルを、次に示そう。

A Complete System of Book-Keeping, by An Improved Mode of Double-Entry : Acomprising Regular Series of Transactions, as they have occurred in actual business; Illustrated by a Variety of Precedents, disposed in such a Manner as to remove every Obstacle in stating the most difficult Accounts, either between Individuals or Partners: together with Approved Forms of all the Subsidiary Books required in Trade; being the Result of Thirty Years Observation and Experience. The Whole Designed as a Perfect Companion for the Counting-House; with a view of fixing a standard for Practical Book-Keeping, suited to the Merchant and Trader of every denomination. To which are added, A New Method of Stating Factorage Accounts, adapted particularly to the Trade of the British Colonies *etc.*, 1789, By Benjamin Booth, late of New York



and now of London, Merchant.

本文248頁に「付表」のついたものである。この長文のタイトル中にも、「ニューヨークとロンドンでの30年間にわたる実務経験にもとづいて改良した実践むきの簿記書」であるとするブースの自負心がよくあらわれている。

彼の簿記書の特色は、後世、「複合仕訳帳制」と「月次総合仕訳帳制」とよばれるようになったすぐれた仕訳帳制の併用にある。とくに複合仕訳帳制こそは、後のアングロ・アメリカン系の簿記での最も特徴的な帳簿制であることは説明の必要があるまい。なお、この帳制の提案は、第6項のハミルトンの簿記書（1777年）にもみられる。

ブースはその簿記書の6頁の「一般原則」で、大略、次のようにいう。当座（日用）帳は‘book of original entry’（原初記入帳）であるが、現金出納帳、手形記入帳、仕入（売上）帳のような補助簿は、同時に、現金収支、手形の受払、商品の仕入（売上）に関する部分的な当座（日用）帳に外ならぬ。一般の当座（日用）帳、これらの部分的な当座帳とともに活用するならば、仕訳帳は総合的なプルーフ（検証）のため index (complete index) と考えてよいと。つまり、彼は、複合仕訳帳制と総合（月次）仕訳帳制とをたくみに結合させた帳簿制を採用したのである。「仕訳帳 B」として、彼は次の中扉を示している。

仕 訳 帳 B	
トーマス・トラスティーのすべての取引を網羅している。	
次の諸帳面から月次に抜き書きしたものである。	
現金出納帳	
手形記入帳	
仕 入 帳	
送り状控	

社債利息記入帳 売上帳、および 一般当座帳
1789年1月1日開始記帳

また、期末の「残高勘定」は、貸借とも、すべて「諸口」として集計額を掲示しており、「検証」機能の専用のもとなっている。このほか、29頁の冒頭で、6ヵ月決算の必要性を強調している点も注目される (do strongly recommend it to every person in trade……)。

ブースは、とくに『前掲書』（24～25頁）で、次のようにいう。

「全取引を単冊の仕訳日記帳に記録せねばならぬとしている点で、イタリア簿記はプリミティブな形態にとどまっているといわざるをえない。種々な補助簿が必要なことは、実務経験上から明らかであり、補助簿の採用に当っては、現金出納帳が収支取引の仕訳日記帳であり、手形記入帳が手形取引の仕訳日記帳である等の事情を明確に理解すべきである。そうでないと無用の重複で帳簿記入は繁雑かつ困難なものとなる。とり立てて不便もなく、私自身で実践してきたことでもあるから、この方法を一般にも推奨しようと思う。」

## 5 複合仕訳帳制の継承者達

イギリスでは、B. ブース以後、複合仕訳帳制を採用した簿記書が多くあらわれてくる。その代表的なものは、後述する P. ケリー『簿記要論』（1801年）であるが、その後も、J. セジャー『商人簿記入門』（1807年）、J. モリソン『完全な商人簿記』（1808年）、T. ペプス『改良簿記組織』（1818年）、P. コリー『実践簿記』（1839年）、B. フォスター『改良簿記教授法』（1843年）とつづく。

ここではとくに、比較的早い時期に、フィラデルフィアで出版された W. ミッチェルの

簿記書を紹介しておこう。18世紀末の1796年のことであった。William Mitchell『新式完全簿記』; A New and Complete System of Book-Keeping, by an improved method of Double Entry. etc., Philadelphia, 1796 は、その序論(6頁)の一節でいう。

「単冊の仕訳帳を用いないという点で反対する人もあろうが、私としては、こういたい。この本で示している方法を採用すれば、とくに単冊の仕訳帳を設ける必要はなく、また、この種の単冊の帳簿の利用価値については、疑問の余地がある」と。

彼は、ブースの場合のように、月次の総合仕訳帳を経由して総勘定元帳に転記するという方法によらず、数冊の分割された仕訳日記帳を用いた直接転記の方法によっている。彼の示した「複合仕訳帳制」のAタイプ、Bタイプ、および彼が「イタリア式」と名づけているCタイプの帳簿制を列記しておこう。

Aタイプ	{	日記帳 (day book)
		現金出納帳 (cash book)
		元帳 (ledger)
Bタイプ	{	日記帳
		現金出納帳
		手形記入帳 (bill book)
		元帳
Cタイプ (イタリア式)	{	当座帳 (waste book)
		仕訳帳 (journal)
		元帳

メヤーからブースへの展開について、J. W. フルトン『英印簿記』; British-Indian Book-Keeping. A New Method of Double Entry and Progressive Adjustment, etc., 1799, 1800. は、理論派と実践派としてとらえ、次のように評している。けだし的をえたものといえる。フルトン (J. W. Fulton) はベンガル歳入局会計部の簿記係で、1799年にベンガル版を、翌年にロンドン版をそれぞれ出版した。

同書の17頁で、次のようにいう。

「簿記書の中には理論だおれのものがすくなくない。しかも、全部とはいわないにしても、その中の多くのものは、メヤーによってふみかためられた道を歩んできたものにすぎない。」

また18~19頁で、次のようにいう。

「実践的な簿記家の数は極めてすくない。その中での首領格がブースであるとみてよからう。彼の複式簿記の実践的な著書は、最高のできばえのもので、1789年に出版された。」さらに、ブースの改革について、その月次総合仕訳 (monthly journalization) を高く評価しながらも、同時に、19頁に次の注を書いている。

「この改良案(注・総合仕訳の体系)は、ブースの著書の以前にも、まったく知られていなかったというわけではない」と。その実例として、1787年ないし1788年のダッカの工場帳簿のうちの製塩部門で採用されていたと述べている。内容の紹介はしていない。

なお、フルトンが実践派の一人としてあげているゴスネル (T. K. Gosnell) について、ジョーンズ (E. Jones) (次項) の「妄想的な主張」に対する冷静かつ明敏な告発者と評している点も、とくに注目される。

補助簿を部分的な当座帳(日用帳)として兼用し、この当座帳(部分的当座帳と一般当座帳)を兼仕訳帳として活用する(仕訳日記帳)ところから、結果的に、仕訳帳が分割され、複合化するのである。このいきさつに留意せねばならぬ。さらに、月次の総合仕訳による検証の発想と結びついて、近代簿記への大きな前進を示すのである。(末尾の補注も参照)

## 6 現金式仕訳帳制の登場： ハミルトン

1777年、アメリカ独立の翌年に、R. ハミルトン『商業入門』の初版が出版された。手許にあるのは1788年版(第2版)である。このほ

かに、1799年（第3版）および1802年（第4版）がある。オリジナル・タイトルは、次のとおりである。

An Introduction to Merchandise, containing A Complete System of Arithmetic. A System of Algebra, Forms and Manner of Transacting Bills of Exchange. Book-Keeping in Various Forms. etc., by Robert Hamilton, Edinburgh : 1788.

構成は、第1編算術、第2編代数、第3編為替手形、約束手形および受取勘定、第4編イタリア簿記、第5編実用簿記、第6編商事法令、および補論となっている。

この第5編『実用簿記』の第1章「イタリア簿記の応用」につづく第2章「現金出納帳と元帳だけの方法」で、現在、現金式仕訳法（cash journal method）ないし現金式仕訳帳制とよばれている方法を、明快に解説している。その要旨は、こうである。

- (i) 全取引が現金取引だけであるのなら、現金出納（仕訳）帳を用いて元帳へ転記できる筈である。
- (ii) 非現金取引がまじっている場合には、ごく単純な「擬制」（fiction）で現金取引に還元すればよい。例えば、掛で商品を売却したのなら、商品を売却して現金を受取り、同時にその現金を相手方に貸付けたと考えればよい。この種の「擬制」をすべての非現金取引に拡大して適用する。
- (iii) 会計責任者が、この種の「擬制」を好まないのならば、「現金出納（仕訳）帳」と「普通仕訳帳」との2冊の仕訳帳（単純な複合仕訳帳制）を用いればよい。

ハミルトンの場合、現金式仕訳帳制とともに、最も単純な複合仕訳帳制をも併行して採用している点を注目したい。前掲の B. ブースに先立つこと12年前のことである。

この現金式仕訳帳制は、イギリス銀行会計の影響というルートを通じて、わが国の銀行会計の領域にも入ってきた。詳細は、拙著『銀行簿記』（評論社）、『銀行会計原理』（法大出版局）あるいは最近の拙論『日本の会計史』（『企業会計』昭和48年1月号～6月号に連載）等を参照されたい。

なお、544頁におよぶハミルトンのこの大著のうちの、簿記を取扱っている第4編と第5編の構成を、参考のために示しておこう。

第4編	イタリア簿記
第1章	一般原則
第2章	特殊な原則
第5編	実用簿記
第1章	イタリア簿記の応用
第2章	現金出納帳と元帳だけの方法
第3章	（省略）
第4章	商業簿記
第5章	貿易業簿記
第6章	土地管理人の簿記
第7章	農業簿記

## 7 異端の改革者：E. T. ジョーンズ

1796年、ブリストル生まれのジョーンズ（Edward T. Jones）が『ジョーンズのイギリス式』（Jones's English System）と名づけた簿記書を公刊して、「イタリア簿記の改革者」を自称した。オリジナル・タイトルは、次のとおりである。

Jones's English System of Book-Keeping, by single or double entry, in which it is impossible for an error of the most trifling amount to be passed unnoticed ; calculated effectually to prevent the evils attendant on the methods so long established ; and adapted to every species of trade. Secured to the Inventor, by King's Royal Letters Patent. That makes

it illegal for any person to use the method without the patentee's licence or authority: which is given with the work.

長文のタイトルの様式は、当時まで一般的なものだが、このような鉄面皮な自己宣伝をしたタイトルは珍しい。

もっとも、このタイトルの「いかなる些細な金額の誤りも見落すこと不可能」とある点のあげ足をとられて、ミル (James Mill, 'An Examination of Jones' English System of Book-Keeping, etc.,') の皮肉な批難をあげた。エルドリッチの『前掲書』(第4項参照) に引用されたミルの論文の一節にいう。

「彼の簿記法の優秀さを示そうと意図して作られた例題をみると、甚だ奇妙なことに、キャラコの10点が紛失している。例題がもっと多かったら、この10倍は紛失したことだろう。」

ミルの論難は、原理的な批判ではなくあげ足とりであるが、この種の悪口ないし皮肉をあびる素地はジョーンズの側に充分ある。なお、このJ. ミルは、経済学者 J. S. Mill の父親とは同時代人ではあるが、まったくの別人である。

ジョーンズ簿記書の最終版は1860年に出ており、ひろく読まれたようである。しかし、その内容たるや、彼が大風呂敷をひろげたほどのものではない。100頁そこそこの小冊子で、しかも、本論はその中の僅かに29頁を占めているにすぎず、あとは、「献詞」、「推薦状」、「王室勅許状」(自称)、巻末の16頁におよぶ予約購読者名簿等である。量的にみても、これほど内容の貧弱な本も珍しい。予約定価1ギニーで大宣伝をし、1795年には1ギニー半に値上げをしている。しかも、本論の書き出したるや、あらかじめ論難を予想しているかのように先手をうち、「経験によってその有用性が立証されるまでは、非難と反対とにあるのは当然である。これが新しい発明

の宿命である」と。「無邪気」というか「あつかましい」というか、おそれいったことである。

イタリア簿記を改革したと自称しても、その実体は、「日記帳」の金額欄の多桁化という少々目新しい形式をとったもので、「工夫」といえるほどのしろものではない。しかも、最も重大な欠陥として、彼の簿記では、名目勘定、売買勘定、損益勘定を悉く欠いているのである。これでは15世紀末の『ズムマ』にも劣ることになる。利益は、もっぱら財産計算(正味財産の比較)のアプローチによって測定するのである。

英人の論評を若干紹介しておこう。1813年版、M. パワー『簡明複式簿記』の序論はいう(2頁)。

「常道からの離脱を試みた唯一の著者は、ジョーンズ氏である。しかし、彼の試みたるや、有用なものというよりもむしろ無邪気なものともみべきで、複式簿記の起源に深くかかわっているとみられる重要な部分を除外している。損益勘定を除くことによって、極論すれば、彼は自身の意図そのものを根底から挫折させてしまったようだ。」

1822年版、R. ラングフォード『イタリア式商人簿記』(8頁)も、ジョーンズに言及しており、結局のところ「イタリア簿記からの離脱」といっても、原理的な面での根本的ないわゆる「改革」ではないと論評している。

なお、ジョーンズ簿記書が出版された同年に、ゴスネル (T. K. Gosnell) が、「ジョーンズのイギリス式簿記」を評して、「妄想的な主張」と論断したことはすでに第5項で紹介した。

無邪気なのか妄想なのかは別として、ジョーンズが、あまりにもジャーナリスティックな(勿論、悪い意味での)自己宣伝をしたこと、内容が量質ともに極めて貧弱なことだけは確かである。高い予約金をかき集めたが、一向に本の出版がはかどらなかったことも事

実である。

どうひいきみにみても、『ジョーンズのイギリス式』の内容は、日記帳の金額欄に貸借2欄のほかに第3欄を開設し、この欄で「資本」の増減の記録を直接に行ない(つまり、「損益計算」という by-pass をとおらず)、期首・期末の資本在高を日記帳の末尾で比較して「利益」を測定するというだけのことなのである。

当時、「新式」、「改良」等の形容詞をつけた簿記書名が流行しており、世相や時代をよく反映しているが、自分の名前と「イギリス式」とを合体した『ジョーンズのイギリス式』という書名には、おそれいる外はない。

## 8 近代簿記の開拓者達：

### ケリーとコリー

前世紀に入ると、その30年代頃までに、優れて体系的な簿記書が、次々に公刊されるようになる。とくに注目されるものとして、ここでは、ケリー (P. Kelly, 1801) とコリー (Isaac Preston Cory, 1839) とをあげておく。

ケリーの簿記書のオリジナル・タイトルは、次のとおりである。

The Elements of Book-Keeping, both by Single and Double Entry, etc., 1801.

この簿記書は、『まえがき』の4頁以下に「簿記小史」(A Short History of Book-Keeping)を掲げており、この点でも異色のものである。内容はともかくとして、意欲的な試みである。著者ケリーは、ロンドンのFinsbury Square Academyの教師である。

本稿の3.「Ledgerの語源」との関連で、ケリーが「簿記小史」の注記でのべているところを、参考のために、引用しておこう。

「奇妙な例外(イタリア簿記の影響)のひとつに、Ledger(元帳)という用語がある。

以前は、Leager, Leiger, Legerとも綴った。この帳簿の名称は、イタリアその他14カ国のヨーロッパの国々では、いずれもマスター・ブック(主帳)という意味になっている。フランスやオランダでは大帳(the Great Book)、ドイツその他では首帳(the Head Book)である。わが国の主な辞典によれば、Ledgerの語意はもともとは『架空の』(fanciful)あるいは『矛盾した』(contradictory)である。Baileyによると、Ledgerはラテン語の動詞である *Legere* (集める)に由来するという。またジョンソン博士の説では、オランダ語の動詞 *Legger* (正しく綴ると *Leggen*) つまり『一個所に位置づける』ないし『一個所にとどめる』に由来するという。

B. プース以来の「複合仕訳帳制」は、ケリーやコリーに至って一段と推進されるようになり、イギリスにおける実務に定着するようになる。

ケリーは『前掲書』(8頁・39頁)で、次のようにいう。

「イギリスのような商業大国の簿記書が、大規模な事業で使いものにならないようなもの(注・伝統的イタリア簿記)ばかりなのは、驚ろくべきことだ。能力のない人か、さもなければ実務経験のまるでない人によって書かれたにちがいない。複合仕訳帳制については、「実務界にみられるモダンな改良された方法」であるとしている。

また、コリー (Isaac Preston Cory) の『実践簿記』は、340頁の大著で内容は一段と充実している。彼の簿記書では、第2章「複式簿記の 'original form' (old Italian form)」, 第3章「複式簿記の実践 (Present Practice)」を分けて解説しており、この第3章では、day-book (一般仕訳日記帳), cash-book, petty cash-book, bill-book, invoice-book, sales-book からなる複合仕訳帳制を周到に説明している。また、「財産」の棚卸(実査)が「財

産計算」・「損益計算」の両面に、どのような重要性をもつかについても、正確な理解を示している。さらに、資本(主)勘定、損益勘定、残高勘定、これら三勘定の相互関連による計算の検証についても、資本(主)勘定の貸方純計(K)プラス損益勘定の貸方純計(k)イコール残高勘定の貸方純計(K')とする明快な構造をたくみに解説している。

第3章ではまた、‘old Italian form’を批判して、次のようにいう(36頁以下)。

「この方法は簡明かつ自然なものではあるが、現在一般に採用されてはいない。その理由は、取引が増大し複雑化しているために、すべての取引を、その発生とともに単冊の当座帳(waste book)に記帳することが困難となり、同時に数人の書記を採用する必要があるからである。」「当座帳の分割は、異なった部局ないし異なった書記に所属するそれぞれの帳簿に割りあてることによって諸取引を単純化するという方法で行なわれる。」「現今、このイギリスで栄えている大規模な企業の実務にみられる当座帳の分割は、以上で説明したようなものであり、このような細分化が行なわれない限り、営業の継続は不可能である。」「分割された当座帳は、それぞれの部局での原初記入帳として利用される」。

いわゆる「複合仕訳帳制」は、前出のように、現金出納帳等の補助簿を「部分的な当座(日記)帳」として利用し、さらに、それらが部分的な仕訳日記帳となるところから、結局、「仕訳帳の分割」という形におちつくことになったものである。

(補注) エルドリッジ『前掲書』(第4項参照)の52頁には、p.ケリー(Dr. Patrick Kelly)について、興味ある記述があるので紹介しておこう。彼は1756年に生まれ、「ロンドン水先案内組合」(Trinity House)での試験官をつとめた天文学者で、彼の主著である‘The Universal Cambist and Commercial Instructor’(1811)は、現在でもしばしば用いられていると。

## 9 近代簿記の完成者： クロンヘルム

シェヤー(Johann Freidrich Schär, 1846～1924)の‘*Buchhaltung und Bilanz*, (1914)’(大正14年、林良吉訳『会計及貸借対照表』)で示された資本方程式( $A - P = K$ , 積極財産 - 消極財産 = 正味財産)ないし物的二勘定説は、余りも有名であり、擬人説や受渡説の万能の時代に、代数的手法を導入して複式簿記の原理を解明したのものとして高く評価され、とくにわが国では、上野道輔教授著『簿記原理』(初版大正11年11月刊、増訂大正14年1月刊)・『簿記理論の研究』(昭和3年10月刊)・『簿記原理大綱』(昭和8年4月刊)に、その影響が顕著である。シェヤーの亜流であるといっても過言ではなく、上野教授のこれらの書物が日本の会計界に与えた影響が大きかったので、今日でも、いわゆる「資本方程式」を巻頭に掲示している簿記書を、しばしばみうけるほどである。

このシェヤーに先立つことおよそ一世紀前、まったく同じ構想のもとに、すぐれた簿記書を公刊した人物がいる。クロンヘルム(F. W. Cronhelm)である。彼の著書のオリジナル・タイトルは、次のとおりである。

Double Entry by Single, A New Method of Book-Keeping, applicable to all kinds of business; and exemplified in five sets of books, by F. W. Cronhelm, London, 1818.

「まえがき」(p. vi)で、彼の構想の布石として、「財産を記録する簿記の目的は、資本の全体価値と構成部分の価値とを、必要に応じて資本主に示すことにある。」とのべ、とくに第1編(8頁)では、「より正確に示すために、代数的な形式で示すことにしよう。a, b, c等を積極部分ないし借方項目とし、

l, m, n, 等を消極部分ないし貸方項目とし, s を資本 (stock) ないし資本主のリアル・ワースとすれば, 部分の和が全体に等しいところから, 次の等式がえられる。」とのべて,

$$a+b+c, etc-l-m-n, etc=\pm s$$

の等式を示した。

そして, この等式 (equality) こそが, 簿記の最もエッセンシャルな方法的原理であるとしたのである。この構想は, 第3章「均衡原理」(4頁ないし10頁)の基本をなしており, a, b, c 等で示されている商品, 現金, 受取手形等のことを「積極財産」(Positive Property), l, m, n, 等で示されている支払手形その他の支払勘定のことを「消極財産」(Negative Property) と名づけた。この「等式」は, 1843年刊の B. F. フォスターの簿記書『改良簿記教授法』にそっくりそのまま引きつがれている。

このほか, 彼がとくに 'New' Method (新式) と自称したこの書物での積極的な主張として, 伝統的な「残高勘定」の廃止と残高要約表ないし検証表 (今日のいわゆる「繰越試算表」) の作成とを提案して, いわゆる「英米式決算法」への方向を示したことが注目される。また, 'Sketch of the Progress of Book-Keeping' という項目で史的研究の一端を示していることも注目される。

参考のために, この書物の全体の構成を示しておく。

序論	1. まえがき (i~iv)	
	2. 簿記発展の素描 (v~x iv)	
第1編	簿記の理論 (pp. 1~46)	
第2編	模本 (範例) (pp. 47~377)	
	Set 1. 小売業	Set 4. 貿易業
	Set 2. 卸売業	Set 5. 銀行業
	Set 3. 製造業	

すぐれて体系的・理論的・独創的であると同時に, 他書に類例のすくない実践的な側面

をも兼ね備えた名著である。

## 10 現代簿記の開拓者達： ソーヤーとバタースピー

1862年に, ソーヤー (Joseph Sawyer) の 'A System of Book-Keeping' がロンドンで出版されている。ニュールンベルグ委員会がドイツ統一商法を制定した翌年のことである。なお, 同書の奥付をみると, この本が脱稿したのは10年前の1852年3月とある。

第1編 (Part 1) の第1頁に, 「財産を取得原価もしくは原価差引減価 (cost less depreciation 家屋と備品につき5%の直接償却) で評価せよ。実現していないいかなる増価をも付加すべからず。」とする立場が明確に打出されており, 前出の統一ドイツ商法 (Das AHGB) 第31条や1897年ドイツ商法第40条の時価評価規定とは好対照をなしている。参考のためにこの両規定の邦訳を明治の文献から引用する。前者 (第31条) は明治19年12月刊『独逸六法・商法』(山脇玄・今村研共訳, 15頁)により, 後者 (第40条) は明治33年6月刊『独逸商法論・附独逸商法正文』(堀内・中村・川合共訳) によった。

第31条 財産目録及財産比較表ヲ調製スルトキハ全財産及貸方 (注・債権のこと) ヲ其時ノ付スヘキ価額ヲ以テ記入スヘキモノトス

第40条 貸借対照表ハ帝国ノ相場ヲ以テ調製スルコトヲ要ス  
財産目録及ヒ貸借対照表ヲ調製スルトキハ之ヲ調製スル時期ニ於テ有スル価格ヲ以テ総財産及ヒ債務ヲ記入スルコトヲ要ス

ドイツ商法における時価評価規定ないし客観価値説の主張が, さまざまな波紋をドイツ会計界になげかけたことは周知のところであろう。

1878年に, マンチェスターの会計士バタ-

スピー (T. Battersby) によって, 'The Perfect Double Entry Book-keeper' が出版された。この簿記書でとくに注目されるのは, 次の3点である。

- (イ) イギリス式の貸借対照表について, 正確な解釈が与えられていること。
- (ロ) プライム・コストの明確な認識に立脚し, 工業簿記の基礎が確立されたこと。
- (ハ) 減価償却の正確な会計的意義が把握されていること。

以下, 焦点をこれらにしぼってのべることにしよう。

バタースピーの簿記書は, 48頁の小冊子ではあるが, 著名なガルク・フェルス『工業会計』(Factory Accounts, 1887) の先駆ともみらるべき優秀なものである。参考のために, オリジナル・タイトルを示しておこう。

The Perfect Double Entry Book-keeper (abridged), and the Perfect Prime Cost and Profit Demonstrator (on the departmental system), for Iron and Brass Founders, Machinists, Engineers, Shipbuilders, Manufactures, etc., by T. Battersby, Public Accountant, Manchester, 1878.

内容の構成は, 次のようになっている。

**第1編** 序論, 簿記の基本原則, 複式記入, 補助簿と仕訳帳と元帳, 仕訳のルール, 転記のルール, 勘定の雛形, 組企の簿記, 有限責任会社の簿記, 簿記の上級理論, 帳簿論と勘定論の概説

**第2編** プライム・コストと利益, 諸方法の概説, プライム・コストと利益の一般原則, 直接費の適用と蒸気部門, 間接費の適用と利益, 採用する帳簿の概説, 一般的な傾向

**補論**

第2編では, プライム・コスト(素価)の計算, 工場設備の減価償却分をプライム・コストに賦課する手続, 部門別計算および直接費と間接費の把握等が, 原理的にも実際的にもよく解説されており, 工業への応用簿記の骨組が, 明確に打立てられている。いかにも, 近代工業都市マンチェスターの会計士らしい労作であり, 現代簿記の先駆である。

ガルク・フェルス (Emile Garcke and J.M.Fells)『工業会計』(Factory Accounts, their principles and practice, etc., 1887) は, 「最初の工業簿記ないし工業会計の書物」とであるとされている。すくなくともそのような「世評」をうけている。しかしとくに注意しておきたいことがある。それは, この「世評」は, もともと, 彼等が「まえがき」(Preface)の冒頭で, 'The present is, we believe, the first attempt to place before English readers a systematised statement of the principles regulating Factory Accounts; etc.,' とのべていることによるものであり, 彼等自身が, 「最初のこころみ」(the first attempt)であると自称することは多少のおこがましさはあるとしても自由であるが, 事実がそのとおりであるという保証はない。バタースピーの簿記書の存在は, 事実がそのとおりではない明らかな証左である。いわゆる「世評」とは, しょせんこのようなものであろうか。研究者の心すべきことである。ガルク・フェルスの『前掲書』は, バタースピーの二番せんであるといっても過言ではない。

なお, いわゆる「イギリス式」の貸借対照表に関するバタースピーのすぐれた見解については, 次項(4)の末尾で紹介しておいた。

## 11 『バランス』概念の展開と問題点

本項は, 16世紀中葉から19世紀までのイギリスの簿記書, 18世紀末から19世紀までのアメリカとカナダの簿記書, にみられる『バランス』(ballance, balance)概念の展開過程を解析して, 「残高勘定」(balance account), balancing, general balance, trial balance



（試算，試算表），true balance, Balance Sheet 等の本質と問題点を，歴史的・発展史的に明らかにしようとする「試論」である。

ここで参照した簿記書目は，次掲のとおりである。

（イギリス）……第1項末尾の書目を参照  
（アメリカとカナダ）

W. ミッチェル『新式完全簿記』（1796年版），  
J. ベネット『アメリカ式実践簿記』（1820年版），  
J. C. コルト『複式簿記学』（1838年版），  
W. H. リッチモンド『総合簿記組織』（1846年版），  
S. W. クリテンデン『実践簿記』（1850年版），  
L. プレストン『プレストン簿記』（1851年版）  
『S. W. クリテンデン『簿記提要』（1853年版），  
C. C. マルシュ『馬耳蘇氏記簿法』（邦訳）（1858年版），  
W. R. オル『カナダ会計人』（1872年版），  
ブライヤント・ストラットン・パッカード『会計家記簿法』（注1）（1863年版），  
『帳合之法』（邦訳）（1871年版）（注2）（注3）

（注1）原題は，‘Bryant and Stratton’s Counting House Book-Keeping’である。『会計家記簿法』とは，土谷温齊がその著書『商法家簿記全書』（明治22年）の中で用いた訳名である。

（注2）原題は，‘Bryant and Stratton’s Common School Book-Keeping’である。訳者は福沢諭吉。

（注3）手許の史料としては，イギリスの簿記書で1567年刊の Johan Weddington 著『記帳法入門』（A Brieffe Instruction and Manner howe to kepe Merchantes Bokes of Accomptes. etc.）がある。ピールの簿記書につぐ古いもので，十分に検討を要する文献であるが印刷に不明瞭な箇所が多く，この拙論では除外した。原典には Iohan とあるが，おそらく Johan の誤りであろう。また，Eldridge の書目（H. J. Eldridge, The Evolution of the Science of Book-Keeping, 1931）では John とある。

### （1）元帳の balancing と残高勘定

元帳の balancing について，パチオリ（Fra Luca Pacioli）は『ズムマ』（1494年）の「計算記録詳論」（第23項）で，帳簿の検証を行ない，旧元帳から新元帳に移記する一連の簿記手続をいうとのべている。定期的決算制が次第に確立してくる段階にまで発展してくると，この‘balancing’ないし‘general balance’のもつ重要性は，一段とたかまる。

大陸系簿記の伝統として，この balancing に際して，繰越項目を「残高勘定」（*conto saldo*, *ballance accompt*, *balance account*）に集合する手続は，一般によく知られているところであり，「損益勘定」（*pro e danno, utite et danno*, *profit and loss account*）とともに双璧をなすものである。後述するように，イギリスおよびアングロ・アメリカン系簿記実務でも，前世紀末ないし今世紀に入ってからでさえも，この「残高勘定」の開設がみられる。

なお，前掲の最古の印刷された簿記書といわれている『ズムマ』では，奇妙なことに，この残高勘定にまったく言及してはいない。同書の第28項「元帳勘定の繰越法」，第23項「元帳のバラシニング」および第34項「旧元帳の締切。借方および貸方の総計」を通覧してみると，元帳に余白がなくなった場合やあるいは慣行的に毎年新元帳を開設するような場合の繰越法として，当該勘定の貸借差額を金額の少ない側に加えるが，この際には仕訳帳を経由する必要がない旨を明らかにしており，商品勘定や費用勘定を「損益勘定」に振替える際に，「取引」ではないから仕訳帳を経由しないとする主旨の第27項「他の勘定のように仕訳帳に記入しない理由」での説明と軌を一にしている。パチオリは，「勘定を繰越すには，先に損益勘定の締切についてのべたと同様の方法による。」（第28項）とのべている。『ズムマ』での元帳の balancing の要旨としては，収益と費用との損益勘定への振

替と、損益勘定差額の資本主勘定への振替とをのべているだけであり、損益勘定とならぶ代表的な集合勘定である「残高勘定」に関しては、いっさいふれていないのである。しかし、大陸系の簿記で、早い時期からこの残高勘定がみられることは、周知のところであり、A. C. リトルトン『会計発達史』（片野一郎博士訳、199頁以下）にも、Johan Gottliebの書物（1548年）での残高勘定や Angelo Pietraの書物（1585年）のそれにふれている。また、リトルトンは、イギリスのR. ダフォンの『商人鑑』（1635年）の残高勘定も紹介しているが、英語で書かれたオリジナルな簿記書で、しかも完本の形で今日に伝えられている最古のものともみられる1553年刊のJ. ピールの前掲書『完全記帳の方法と様式』にも、残高勘定は、すでにみえている。大陸系簿記および16世紀にその伝統的技術を継承したイギリス簿記、さらに、イギリス簿記を継承したアメリカ簿記これらを通じて、前世紀末の頃まで、残高勘定は忠実に引き継がれてきたものである。大陸系簿記（「イタリア簿記」）をそのまま導入している初期のイギリス簿記書で例外なくこの残高勘定が開設されているのに、「イタリア簿記」（Italian Book-Keeping）ないし「ベニス簿記」の代表的な解説書としての『ズムマ』に残高勘定の姿がないのは、どうにも平仄が合わない話ではある。ちなみに、残高勘定を開設しないいわゆる「英米式決算法」（わが国での一般的な呼称）とか‘business method’（アメリカでの呼称）とかよばれている方式は、ずっと後になってから（前世紀に入ってから）アングロ・アメリカン系簿記で実践されるようになったものである。もっとも、この種の方式の提案は、大部前からあった。詳細は後にのべる。

## （2）イタリア簿記の伝承

1543年に出版されたと伝えられているオールドカッスル（H. Oldcastle）の前出の簿記書

が滅失しており、またインピン（Ympyn）の1547年に出版の簿記書が不完全な形でしか伝えられていない現在、前述のようにJ. ピール（James Peele）の2冊の簿記書（前掲、1553年、1569年）は、イギリス簿記書として完全な形で現存している最古のものである。

『完全記帳の方法と様式』では、Quaterneあるいはgreate booke of accomptesという名称の総勘定元帳の末尾に、Ballance of accompt「残高勘定」を開設している。また、『貸借手引き』では、問答の形式で、貸借の説明や、財産目録（Inventorye）、「仕訳帳」（Journall）および「総勘定元帳」（Leager）の雛形による解説をしている。元帳（Leager）の末尾には、「この帳簿のバランス」というタイトルの「残高勘定」を開設している。元帳の名称として、この両書で、Quaterne, or greate booke と、Leager とある点は興味深い。

『オールドカッスル・メリスの簿記書』では、ヨーロッパ簿記の伝統を忠実に継承しており、Memoriall（日用帳）、Journall（仕訳帳）、Leager（元帳）よりなる三帳簿を解説し、また、「有名な損益勘定（Profit and Losse）」、帳簿のballanceとくにballancing the leagerについては、独立した第21章を開設している。元帳の末尾に開設した「残高勘定」は、後世のものとは比べて、記号化（To, By, To, Per）は行なわれておらず、叙述式の濃厚なもので、その借方側の頭書は、‘Ballance of this booke oweth…… for ready money remayning, as in Creditor’ とあり、また貸方側の頭書は、‘Ballance of this booke is due to have…… and is for so much being the very……’ とある。また、最終章（第25章）には、「試算表」の解説をしている。その実体は今日の繰越試算表であり、検証手続としては、「残高勘定」と「繰越試算表」との二本建になっている点が、とくに注目される。今日のいわゆる「英米式決算法」と「大

陸式決算法」とが併存しているのである。もっとも、こうみないで、「残高勘定」で締切の検証を、「試算表」で繰越の検証を、それぞれ分担しているとみられないことでもない。少々うがった見方ではあるが。

17世紀に入ると、出版された簿記書の数も増えるが、30年代の2冊の書物をまずとりあげることにする。I. G. Gent., 『*最良記帳法*』(1632年刊)と、R. ダフォーン (Richard Dafforne) 『*商人鑑*』(1635年刊)である。前者には one Carpenter Gent. という書込みがあるが著者名は不明である。メリスの書物と全く同じ構成・内容のもので、イタリア簿記のそのままの引き写しである。「残高勘定」と「繰越試算表」との両建になっている。ダフォーンの『*商人鑑*』の方は、すくなくとも当時のものとしては、抜群のできばえである。筆者のみる限り、18世紀に入ってからでさえ、なかなかこれほどの完備した簿記書は少ないと思う。タイトル頁の著者の紹介文に、'Compiled by R. Dafforne of Northampton, *Accountant*, and *Teacher* of the same, after an Exquisite Method, in the *English*, and *Dutch* Language.' とある。生徒(愛教者)と教師の間答体になっており、46頁以下に「元帳の締切(バランシング)」として、ballanceの語源、ballancingの必要をのべ、さらに、ballanceに(i) Triall-ballance(試算表)と(ii) True-ballance(真算表)の二種があるとしている。「試算」(trial)に対する「真算」(true)という見方は、興味深い。彼のいう真算表というのは、元帳の残留項目(Remainers)を一表に集めたもので、今日の「繰越試算表」ないし「バランス・シート」に当るものである。「試算(表)」について、次のようにいう。「バランシングもクロージングもしていない総ての元帳諸勘定の借方金額を、一葉の紙片もしくは特に開設した帳簿に書き上げ、貸方金額についても同様の手続をとる。貸借が均衡すれば、仕訳帳から元帳へ

の転記の正確さが検証される」。また、「真算(表)」について、次のようにいう。「元帳諸勘定の残留額について行なう。現金、在庫品、未完了の航海、家屋、土地、未決済人名勘定等であり、これらは、いずれも新元帳に繰越するのである」と。なお、注記として、残高勘定への振替えについて仕訳帳を経由する手続をのべるとともに、元帳に残高勘定そのものを開設せず、各勘定の残高を、直接、旧元帳から新元帳へ繰越す手続も示している。いわゆる「英米式決算法」に相当するこの手続に注目したい。

また、とくに注目すべき点は、彼が『*バランス*』という概念に関連して次のようにのべていることである。

「バランスという用語に代えて、私見では、『*財産の計算*』(Estate-reckoning)を用うべきであると考え。帳簿の全体を見渡さなくとも、自分の財産の状態を、残高勘定というこの一勘定で知ることができるのである。」

元帳の検証ということの外に、ここに、財産状態の鳥瞰的な観察という視点が明確になっているのである。

A. リーセット (Abraham Liset) 『*両房法*』(Amphithalami, 1660)になると、同様の主旨が、次のように明示されている。「残高勘定を理解するためには、財産状況(your affairs)をすばやく遅滞なく見る必要があることを知らねばならぬ。」

### (3) 「残高勘定」・「試算表」・「バランス・シート」

これら三者は、もともと、balance 概念から生じた同根のものである。事実、往時の簿記書では、概念上ないし用語上で混淆しているものも少なくない。

ここでは、まず、「残高勘定」の様式におこった変化からみていくことにしよう。

S. モンテージ (Stephen Montage) 『*貸借法*』の初版は1675年、再版が1682年にそれぞれ

れ刊行されている。再版の補訂人は、ジョン・ビスコーである。この本の「残高勘定」は、前出のような叙述形式を全く払拭したものであり、to……, by……, の定型が用いられている。R. コリンソン(Robert Collinson)『完全な会計人』(1683年刊)も同様に、to……, per……, となっている。このコリンソンの簿記書では、通覧した限り、どうも「残高勘定」と「試算表」との概念と用語とがはっきり区別されていないようである。

18世紀に入ってから簿記書では、残高勘定について、次の二つの傾向への分極化現象が認められる。

- (イ) 検算の機能の重視。
- (ロ) 財産状態の鳥瞰の機能の重視。

検算の機能を重視するという傾向は、残高勘定と試算表との混淆をもたらすとともに、その反面では、A. マギー (Alexander Macghie)『簿記原理』(1718年刊)のように、残高勘定の内容が借方側・貸方側ともに、等額の合計額(諸口×××)だけのものとなっている。また(ロ)の観点からは、これとは逆に、残高勘定の内容が、明細に整備され、今日の「バランス・シート」と比べても遜色のないものとなっている。事例としては、H. ステファーズ (Hustcraft Stephens)『イタリア簿記』(1735年刊)の残高勘定がある。「バランス・借方」および「対照 per contra・貸方」という見出しで項目が掲示されており、また、とくに次の説明は注目すべきである。彼はい

う。「この財産状態の全体的な調査をバランスというのであるが、この勘定の借方側は状態 (Condition) をあらわしており、貸方側は範囲 (Extent) をあらわしている。」

J. メヤー (John Mair)『簿記法』(1736年刊)では、87頁に Balance Sheet という用語が出てくるが、次の88頁では、Ballance Accompt となっており、明らかにこれらの用語の不統一ないし混乱が認められる。検証機能を重視している。会計の計表としての独立した「バランス・シート」ではない。同じように、balance-account と balance-sheet とを混用している事例に、W. ゴードン (William Gordon)『国際会計人』(1768年、再版)の56～57頁がある。

#### (4) 「バランス・シート」への展開

19世紀の簿記書の検討によって、「バランス・シート」への展開過程をみることにしよう。

ベンガル歳入局の会計部の簿記係 (Book-keeper in the Office of the Accountant: to the Board of Revenue, Bengal) であったフルトン (John Williamson Fulton) は、『英印簿記』(British-Indian Book-Keeping) を出版した。ベンガル版は1799年、ロンドン版は1800年であった。この書物の43頁には、1797年9月30日付の「残高明細表」(Particulars of the Balance) が示されている。その実況は、次掲のとおりである。

1797年9月30日の残高明細表	
負 債 (Demand Payable)	財 産 (Property)
Jugmohun からの証書借入金……………10,500	牛および牛肉…………… 2,550
ジェームス・ジョーンズ…………… 210	監 商 会……………18,800
銀行借入金…………… 1,200	政府関係債権…………… 1,407
支払手形…………… 3,000	銀行預金…………… 543
14,910	商 品…………… 5,000
正味身代……………14,208	現 金……………50
29,118	C. Durham…………… 768
	29,118

近代簿記の系譜（久野）

エバンス・ドロッパー・ハリファックスの財産状態表			
1817年1月31日			
ジョンソン商会	107. 3. 6.	商 品	312. 3. 10.
フラスター商会	100. 14. 6.	現 金	60. 17. 4.
	207. 18. 0.	ウィルソン商会	360. 11. 8.
純 資 本	567. 18. 10.	チャールス商会	25. 4. 0.
	£ 775. 16. 10.	ウィリアム商会	17. 0. 0.
			£ 775. 16. 10.

いわゆる「イギリス式」のバランス・シートである。彼は、この残高明細表を月次に作成すべきことをのべている。その機能は、財産状態の表示と元帳の検証とを兼ねたものとされている。

さらに、1818年にロンドンで刊行されたクロンヘルム (F. W. Cronhelm) 『新式簿記』 (A New Method of Book-Keeping) では、とくに、「新式」であるゆえんについて、元帳に開設される残高勘定を廃止して、『インベントリー』と称する「残高要約表」(Extract of Balance) ないし「検証表」(proof of books) を、独立した帳簿 (a distinct book) として設けることを提案している。勘定 (account) から独立した「計表」への過渡的な事情をよくあらわしている。また、大陸系簿記での残高勘定の開設を、次のように批判している。

「イタリア簿記は、Extract of Balance を、残高勘定という名称で元帳に開設しているが、このようにインベントリーを帳簿の中にふくめる方法は、原理的にみて間違っている。」(33頁)

「各勘定の残高は、貸借反対側に直接記入すべきであると断定してよい。」(35頁)

また、彼は、65頁に資本主を主格とする「財産状態表」(The Estate) を掲示している(上段を参照)。これもまた、いわゆる「イギリス式」のバランス・シートである。なお、前掲の「残高要約表」は、今日の「繰越試算

表」に相当するもので、この「計表」とは貸借の位置が逆である。

フォスター (B. F. Foster) 『改良簿記教授法』(1843年刊) は、バランス・シートという名称を用いた「計表」を示し、「資産をバランス・シートの借方つまり左側に、負債を貸方つまり右側におく。差額は、純資本ないし現在財産在高である。」(33頁) と解説している。いわゆる「大陸式」の形式である。なお、この計表の機能は、検算(証)に求められている。また、彼は、とくに残高勘定について、次のようにのべている。

「貸借均衡記入のルールを保持して元帳を締切ろうとする場合は、元帳に残高勘定を開設する必要がある」。この記述から推論すれば、彼が「バランス・シート」と称しているものの実体は、今日の「繰越試算表」に外ならない。

シェリフ (Daniel Sheriff) 『複式簿記全書』(1852年版) は、46~49頁で、勘定のバランスングについてのべ、試算表による検算を説明した後、次の二種のバランス・シートを示している。

(1) Balances of our Property and Debts

(2) Balances of our Profits and Losses

そして、(1)によって「正確な財産の状態」を、(2)によって「営業の全成果」を、それぞれ示すとした。(1)の「計表」(第一のバランス・シート)の形式は、「大陸式」である。

ソーヤー (Joseph Sawyer) 『簿記組織』

バ ラ ン ス ・ シ ー ト									
借 方					貸 方				
1851年 1月 1日									
元 頁					元 頁				
1	Wm Henry 商会	103	16	0	13	Richardson 商会	36	11	0
2	何々 (人名勘定)	1,015	11	3	14	何々 (人名勘定)	40	11	1
3	.....	.....	...	...	15	.....	...	...	...
4	.....	.....	...	...	16	.....	...	...	...
		3,179	16	2			5,513	19	3
35	支 払 手 形	5,013	12	3	34	現 金	36	11	0
					36	受 取 手 形	126	13	0
					P.L. 1	不 動 産	1,011	0	0
					P.L. 2	家 什 品	300	0	0
					P.L. 3	商	8,026	13	0
		8,193	8	5		£	15,014	16	3
P.L. 4	資 本 勘 定	6,821	7	10					
		15,014	16	3					

(1862年刊)は、開業貸借対照表から出発して簿記の体系的な解説を行なっているが、バランス・シートの作成手続に関して、次のようにいう。

「バランス・シートの貸方側に元帳の借方項目 (the Debit) をおき、バランス・シートの借方側に元帳の貸方項目 (the Credit) をおく」。同書の3頁に掲示されているバランス・シート (イギリス式) の概況は、上掲のとおりである。

バタースビー (Thomas Battersby) 『完全複式簿記』 (The Perfect Double Entry Book-keeper, 1878, p.30) は、「バランス・シート」と「残高勘定」との関連で、次のような注目すべき見解をのべている。

「バランス・シートを構成する各項目は、まさしく、残高勘定のそれと同一であるが、貸借は逆になる。その理由は、残高勘定が財産勘定のひとつ (a property account) であり、元帳の借方資産諸勘定と貸方負債諸勘定

の集合物にすぎないからである。バランス・シートは人名勘定のひとつ (a personal account) であり、資本主に提出するものである。資本主は負債に関して借主 (方) であり、資産に関して貸主 (方) である。それゆえ、資本主に提出される資本主の人名勘定つまりバランス・シートは、この貸借関係を示す様式のものとなるのである。」

イギリス式の貸借対照表が、「資本主勘定書」であるというこの見方は、沿革史的にみても正当であり核心をついたものである。

#### (5) 拡大された「バランス・シート」

balance account (残高勘定) と同根の「計表」(sheet) としての balance sheet は資産・負債・資本の残高の表としての性格を、本来的・沿革的にもったもので、最も中心的な機能のひとつには、検証表 (proof sheet) のそれに求められた。

ところが balance を「均衡」の概念でとら

近代簿記の系譜（久野）

え、さらに決算整理手続を経て「損益」・「在高」の両計算領域の全般的なとりまとめに利用する今日のいわゆる「精算表」 working sheet のことを balance sheet と称した事例がある。アメリカの簿記書の事例をあげておく。イギリス簿記書には、同例をまだみえない。

Bryant and Stratton's Common School Book-Keeping, 1871. この簿記書は、明治6年6月刊、福沢諭吉訳『帳合之法』の原典である。第2編の Set II, Grocery Business の141頁にでてくる Balance Sheet の実況

は、次掲のとおりである。147頁にくわしい作成方法がでており、とくに「われわれが知る限りで、最も完全で、シンメトリカルなもの」とのべている。なお、福沢は「平均表」と訳している。

Bryant and Stratton's Counting House Book-Keeping, 1863. も、まったく同様である。コルト『複式簿記学』（J.C. Colt, The Science of Double Entry Book-Keeping, 3rd., ed., 1838）の場合の Grand Balance Sheet の内容も同様であり、その実況は次掲のとおりである。

バランス・シート

勘定科目	元 頁	試算表		商品棚卸	名目		資本		実体	
		借方	貸方		損失	利益	借方	貸方	財産	負債

ジョン C コルト

グランド・バランス・シート

勘定科目 1837年6月30日	元帳金額		損益勘定		商品勘定		残高勘定	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方

（補注） R. ブラウン編著『会計史』（1905）に収録の J. R. Fogo 稿「簿記史」（p. 135）によると、複合仕訳帳制の萌芽は、ヨーロッパではすでに16世紀にみられるとして、1588年にアムステルダムで刊行の Nicolaus Petri, Practique omte Leeren Bekenen Cypheren ende Boekhouden met die Reghel Coss, ende Geometrie をあげている。